◇産業風土記◇
おばけの金太

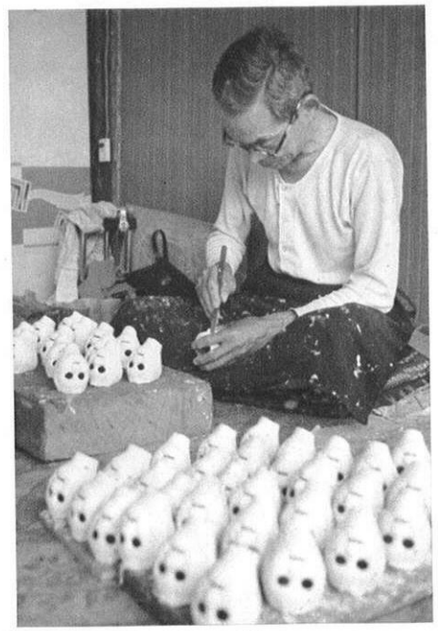
まつかな顔に黒い烏帽子。ヒモをひくと、目をむき、赤い舌を出す。おどけた表情がおかしい。「目くり出し人形」とも呼ばれる。

由来書によれば「清正公の熊本築城の折、足軽に金太という者があった。風貌滑稽、冗談を飛ばし、職人、人夫を笑わせるので、皆疲れを覚えなかった。それで〝おどけの金太〟と呼ばれ築城中の人気者であった。嘉永の頃、人形師西陣屋彦七が、この伝説から玩具を作り非常に好評を得た。真紅の顔、ぐるぐる回る目玉は人の肝を奪うようであったので、誰言うと無く〝おばけの金太〟というようになった」とある。

現在、製作にあたっている熊本市新町の厚賀新八郎さん（二六）は十代目。完全な手づくりで一カ月に四百個がやっと。地元はもちろん、全国各地から注文が多く、将来は月産千個まで持っていきたいという。熊本の伝統ある民芸品の一つである。

▲ボール紙を水でやわらかくした材料を型押し器にあてて、人形の原型ができあがる。

▲ヒモを引っぱると目玉が一回転、舌がペロリ、その仕掛けがミソだけに、バネの具合の調子を正確に…



▲頭部や面の整形作業。埴輪（はにわ）のような素朴な造型感がある。

▲色つけは楽しい。黒、赤の塗料をつけると独特な金太の表情が生きてくる。

△ここに人あり▽
英語のオバさん

熊本市黒髪町
富永サカエさん

熊本市内の、あるホテルの午後。ロビーやテラスでくつろぎ、庭を散策する人たちの中に、青い目の客が意外と多かった。その、いかにもバタくさい大柄な外人たちの中で、流ちょうな英語で対話する富永サカエさん（六八）の小柄な身体がひときわ印象的であった。

□　□

富永さんの英語が流ちょうなのも道理。四歳の時、両親と渡米。シアトルにあるワシントン州立大学の英文科卒業という本場仕込みなのである。

東京でアメリカ系の銀行などに勤務したのち、戦後は熊本に帰り、得意の英語をフルに生かして、CIF（情報文化局）の青少年団体指導顧問として、民間団体の指導育成に当たり、その後も、熊本日米文化センターなどに勤めてきた。そして、外人客との応待に、その語学力を買われ、現在のホテルに勤めてから十年になる。富永さんの肩書は支配人補佐。しかし、その堅苦しい肩書を少しも意識させない人だ。物静かな小さい声の応答ぶりにも、ほかのお客の迷惑にならぬようにといった、細やかな心遣いが感じられるのである。

言葉と心のガイド役

このところ、熊本を訪れる外人客は年々に増加。四十四年は約三万人（四十四年観光統計）と、七年前の三十七年にくらべて二・四倍に増加している。

ところで、団体旅行でガイドのついている場合は別として、一人で旅行をしている外人の悩みは、当然のことながら言葉の障害。自分の表現が、相手に通じないことが一番苦しいようだと富永さんはいう。「そうした欲求不満がつもって、私たちに当たり散らすなんてこともありますね」そういう時は、なにはさておいても不満の吐け口になってやる。ようやく言葉がわかる相手に会って、思いきり話すとスッキリするのか、翌日には、きのうとはうってかわって上機嫌になっているという。

こうした言葉の障害を緩和するための一つの方法として、富永さんは観光地や文化財など、たとえば水前寺の〝古今伝授の間〟などにも、英文の説明をつけておくといった、ちょとした心くばりが必要なのではないかと提案するのである。

ある観光PRの接点

はじめて熊本を訪れた時、親身になって世話をしてくれた「英語の話せるオバさん・トミナガ」との再会を、スケジュールに組み込んでくる外人もいる。富永さんが顔を忘れていて恐縮してしまうこともある。「思いがけず懐しい顔に会ったり、便りを貰うのは嬉しいものですよ。」

三年前、アメリカの女教師が二人、ホテルを訪れたことがある。話を聞いてみると、全国いたるところで、名所とか立派な家を見せて貰った。それも良かったが、もっと、ごくありふれた庶民の生活を見たいという希望に応えて、思い切ってわが家へ連れて行った。「なんの接待もしなかったんですが、かえってそれがよかったんでしょうね。三歳と一歳になる私の孫をあやしたりして、遊んでいきましてね。日本の旅行のうちで、最も楽しい思い出になったと便りをくれました」。

富永さんは通訳案内業の免許を持っているわけではない。しかし、利用客へのサービスの一つとして、市内の案内をすることがある。長い経験から人情の機微にも通じ、〝決していいかげんな説明はしない〟というのをモットーにする〝英語のオバさん〟は、外人客にとって、まことに重宝な存在なのである。

「外人客には泰勝寺など、熊本の歴史と自然が息づいている場所が喜ばれるようですね」という富永さんは、たとえば菖蒲（しょうぶ）一つにしても、肥後しょうぶの解説をつけ加えるといった具合に、郷土色を盛り込んで印象づけることを心掛けているという。それだけに、郷土百般の勉強は、今でも日課の一つとして欠かせないことなのである。

この仕事が楽しいという富永さんに、熊本の旅行を終えたのであろう外人の夫婦が、感謝の意を込めるように、かわるがわる握手を求めて去って行った。